

第2学期始業式校長あいさつ(2019年9月7日)

皆さんおはようございます。

武蔵の長い夏休みもあっという間に終わり、いよいよ今日から二学期になりました。大きな事故もなく、この日を迎えられたこと、そして皆さんの顔を見られたことを嬉しく思います。

ただ、最初に悲しいお知らせをしなければなりません。昨年の5月まで13年間、武蔵の校医として長年ご尽力をいただいた荒牧琢巳先生が、この8月30日に80才で亡くなりました。直接お世話になった生徒は少ないかもしれませんが、荒牧先生には武蔵生の健康やいざ怪我や病気などで困ったというときに、本当に助けてもらいました。荒牧先生は武蔵のOBで在学中は報道班で活動されたそうです。また、ご趣味は電車の時刻表を調べ、鉄道に乗るということで、毎年、記念祭での鉄研の発表を楽しみにされていたとのこと、ここに皆さんに報告し、荒牧先生に心より哀悼の意を表したいと思います。

さて、本題に入ります。母校に43年ぶりに戻ってきて、こうして皆さんへお話をするのは、入学式を除けば、今日で2回目になります。

今日のお話は大きく分けて3つ。

一つ目は、この夏休みの武蔵生の活躍や様々なチャレンジについて。二つ目は、1学期を振り返って、43年ぶりに母校に戻ってきて私自身が武蔵生と交流して感じたこと。三つ目は、2学期に向けてさらに武蔵生に考えてほしい問いを投げかけたいと思います。

まず一つ目の夏休みの武蔵生の活躍です。中1は山上学校、中2は今年初めて行ったみなかみ町での民泊実習。私も両方に同行させてもらいましたが、それぞれ良かったですね。中1は自然体験、中2は農業体験や生活体験の中で、武蔵生の基盤を作る良い取組だと思いました。これらは学年全員の共通体験ですが、中3以上は、それぞれの興味・関心に応じて、多彩な分野でチャレンジをしたと思います。

すべてカバーできていないと思いますが、私のほうに入ってきている情報を中心に、この夏の武蔵生の活躍、チャレンジについて紹介したいと思います。

まず理科系のことについてお伝えします。日本生物学オリンピックです。

高2の2名が日本生物オリンピックの予選を見事に突破し、8月に長崎で行われた本戦に出場。1名はさらにそこでも銅賞を獲得し、来年の生物オリンピック国際大会の日本代表

候補に選ばれました。おめでとうございます。

それから化学グランプリ。全国の高校生以下約 4000 名が参加する化学グランプリに高 2 と高 1 の生徒が参加し、二人とも見事銅賞を獲得。うち高 2 の生徒は来年に行われる国際化学オリンピックの日本代表候補に選ばれました。おめでとうございます。

続いて地学です。ちょっと前になってしまい、披露する場面がなかったのですが、高 3 の生徒がさる 5 月に開催された日本地球惑星科学連合 2019 年大会で行われた『高校生におけるポスター発表』で、『伊豆大島野増層における火山砕屑物の堆積環境と噴火口の位置の推定』の発表を行い、見事第二位にあたる優秀賞を獲得しました。おめでとうございます。

続いて運動部関係。水泳部は水球の都大会に勝ち上がり、7 月に山梨で開催された関東大会に出場し、1 回戦で同じ東京代表の桐朋高校に勝利、続く 2 回戦で埼玉の伊奈学園総合高校に勝利し、見事ベスト 8 となりました。おめでとうございます。

高校卓球部。8 月に行われた私立大会で団体戦 3 位。さらに高 2 のダブルスがベスト 16 に入りました。おめでとうございます。

中学三年生の部活の活躍も聞きました。中学サッカー部、中学バスケット部は、7 月に行われた区大会・地区大会を突破して、都大会に勝ち上がりました。ともに練馬区はレベルの高い激戦区と聞いています。バスケット部は 11 年ぶりの都大会ということで、見事だと思います。中学野球部も、惜しくも都大会は逃しましたが、区大会のベスト 4 まで頑張ったと聞いています。おめでとうございます。

それから私が武蔵生を見て感心したのは、多くの生徒がこの夏休みを利用して、海外に挑戦していったことです。枚挙にいとまがないのですが、紹介します。まず国が実施している「トビタテ！留学 JAPAN」の厳しい選考を武蔵生として初めて突破して得た奨学金でカナダに短期留学した生徒、A I G という民間団体の無償プログラムで、これもまたやはり厳しい選抜を突破してアメリカに短期留学した生徒。さらに、今年から武蔵で実施している校外活動奨励基金に応募し、そのサポートを得て、カナダやアメリカ・シアトルやオーストラリアのサマースクールに行ったり、学校で紹介した読売新聞の企画でオランダやイギリスで環境問題を学びに行ったり、さらに武蔵学園が実施している RED プログラムでは、今年はサンフランシスコのスタンフォード大学やグーグル本社に行ったり聞きました。あるいはやはり学校で紹介した高校生のプログラムで中国にいった生徒や、武蔵大学と合同で実施しているイングリッシュ・サマー・スクールに参加して、これはある意味

では国内留学といえると思いますが、外国人との集中的なコミュニケーションを通して、英語力をブラッシュアップした人も数多くいました。他に学校には関係なく海外に留学に行った生徒もいると思いますが、こうした学校の関係で海外留学にチャレンジした生徒は今年全部で27名、国内留学ともいべきイングリッシュ・サマー・スクールやREDの国内プログラムに参加した67人で合わせると94名が、この夏休みを利用して、国内外のグローバル関係の取組にチャレンジしたことになります。

グローバルはMUSTの時代に着実に入ってきているとつくづく思います。後ほど紹介しますが、この2学期にまずフランス、ドイツ、オーストリアの留学生が武蔵で学びます。そういった機会も利用して、それぞれの武蔵生のグローバル化へのチャレンジに期待しています。

この他にも、本当に限りがありません。部活の話も、今日紹介した以外に、暑い中、運動部でも文化部でも黙々と取り組んだ人たちがたくさんいます。9月の体育祭に向けて準備を進めていた実行小委員の皆さん。それから、総合講座の一環で、全国各地で地域の課題を学んできた皆さん。その他、学校の紹介で国内の科学セミナーや医師体験にいった生徒たち。あるいは後ほど紹介しますが、ドイツやオーストリア、フランスからの留学生と一緒に赤城で行った国際交流合宿を運営し、実施した武蔵生。それから勉強一筋、受験に打ち込んだ3年生も多かったと思います。

とにかく色々なことにチャレンジしようとする気持ちが素晴らしいと思うし、私は武蔵に戻ってきて、実に多彩なことにチャレンジしている武蔵生はすごく格好いいなと思いました。

さて、二つ目のお話。1学期を振り返って武蔵生に対して感じたことです。

そのお話をするにあたって、まず5か月前の4月9日の始業式で、私は武蔵生への期待ということで5つの話をしましたが、覚えている人はいるでしょうか。

一つ目は自覚と感謝。つまり自分たちが恵まれているという自覚とそのことへの感謝の気持ちを持つということ。

二つ目は志。つまり人生をかけて自分は何を成し遂げたいのかという志をもつということ。

三つ目は、そのためにも自調自考のエンジンを10代のうちに持つということ。そして四つ目は公共心を持つということ。最後に五つ目は人権感覚を磨くということでした。

一学期の間、例えば昼休みに生徒面談をはじめ、皆さんに色々とお話を聞きながら、今の武蔵生はどんなのかなあと見ていました。

それで、私の皆さんの印象、武蔵生の良さをもし一言でいうと「独創的でリベラル」。何か自分の意見や自分の考えをもっている。それでいて他者に対して寛容というカリベラル。自由な環境の中で、わくわく・わいわいやりながら育っていく、この「独創的でリベラル」というのが、まさに武蔵生だと思いました。武蔵生は本当にいいですね。

ただ、先ほどあげた5つの期待のうち、「人権感覚」という問題、つまり人を人として大切にできるか、人間としての尊厳を大切にしているかということと、「公共心」、これも定義は難しいけれど、「みんなの幸せを願う心」「人のために何かをしようとする心」については、私は武蔵生に限らず、今の日本が抱えている課題だと思っています。そして、これらは習慣として身に付けることが必要だと思っています。

「人権感覚」と「公共心」。この二つのことについては、今後もこだわっていきたいと考えています。より良き習慣をぜひ10代のうちに身に付けてほしいと願っています。

最後に三つ目。皆さんに改めて考えてほしい「問い」の投げかけです。

それは先ほども触れた「自ら調べ自ら考える」いわゆる「自調自考」のエンジン。「それがなぜ大事なのか？」という問いかけです。皆さんどう説明しますか？

私がなぜこんなことを考えたかと言うと、武蔵に戻ってきて多くの卒業生に会いました。記念祭では音楽プロデューサーの亀田誠治さん。卒業生が講演をする木曜会では早稲田の田中愛治総長。ちなみに田中総長は今度9月21日の土曜日に同窓生が集まるホームカミングディで武蔵に来て講演をしますが、木曜会と同じように現役生も聞くことができるそうですので、興味のある人はどうぞということでした。お二人とも共通して、武蔵で学んだこととしてあげられた財産は「自ら調べ自ら考える」ってこと。それじゃ、なぜそれは大事なのかって考えていました。

そんな折り、この夏休み中8月の終わりに、そのことを深く考えさせられるセミナーに参加しました。

それはアスペンセミナーというものです。アスペンというのは、アメリカのコロラド州にある保養地で、世界中のビジネスや政治のリーダーが一年に一度避暑で訪れて、世界の

古典を読む。そのことを通して対話をして、現代の社会や文明の問題を考える。人を批判する議論ではなくて、お互いをリスペクトし合って言葉を交わす対話です。そういうセミナーで、もう70年ぐらいの歴史があります。その日本版、日本語による日本でのセミナーが、1990年ぐらいから行われています。

私が参加したセミナーは、ちょうど40歳から45歳ぐらいという働き盛りのビジネスパーソン20名に交じって、世界の古典を読みました。

古典というのは、やっぱりすごい。長い間、残ってきたというのは、それなりの意味がある、価値があるからだと思います。

今回読んだ古典を書いた思想家をあげます。

プラトン、アリストテレス、パスカル、カント、デューイ、オルテガ、ベルクソン、ソロー、シェイクスピア。そして日本でいえば、夏目漱石、森鷗外、内村鑑三、紫式部、東洋思想でいえば孟子などなど。

古典といってもテキスト用に抜粋されているものでしたが、そのテキストをちゃんと予習をすることが参加の条件だったので、とても大変でした。ただ、古典との対話や参加者との対話を通して、結論はわからないけれど、「そうなんだあ」「なるほど」と思ったことが何回もありました。

古典、英語でいうとクラシックスという言葉の語源は、ギリシア時代に「危機」に際し、その「危機」を救うために編成された艦隊の名前に由来するそうです。したがって、危機を救うものが古典であり、教養だということなんですね。なるほどと思いました。

さて、そうした古典を読む中で、なぜ自調自考が大事だと考えさせられたのか。

そのことを根本的に考えさせられる言葉に出会いました。パスカルの著書『パンセ』にある、次の有名なフレーズです。

「人間は考える葦である」

この有名なフレーズの前後の文の中で、パスカルは「人間はひとくきの草に過ぎず、宇宙に対して無力であるけれど、考えることができる。そして、われわれの尊厳のすべては考えることのなかにある」と言っています。

興味のある人は是非文献にあたって、『パンセ』を読んでみて下さい。われわれの尊厳のすべては、考えることのなかにある。つまり自ら調べ自ら考えること自体が人間の尊厳なんだということですね。私は感銘を受けました。

さらに、現代社会を振り返ると、人が考えなくても済むような環境が整っている。あまりに便利なものが身の回りにあり、あまりにも親切なものが身の周りにあり、人は深く考えなくなる。あるいは考えられなくなる社会になっているのではないか。AIの進展や、スマホなんかいい例ですね。ポピュリズムもそうかもしれません。

何故自ら調べ自ら考えることが大切なのかというと、そのこと自体が人間の尊厳をもたらすものであり、まして考える力を奪いかねない現代社会では、一層考える力が求められるということだと私は思います。

だから武蔵が、自ら調べ自ら考える力という理念を掲げ続けてきたということは深い。本当の意味で、自調自考というエンジンを10代に身に付けることが重要なんだと私は思います。

一昨日、武蔵の卒業生で同級生でもある東大の五神真総長に会いましたが、彼もまた、武蔵で学んだことは自調自考の精神であるといったうえで、こんなことをいっていました。「時代を変えられるのは、自分で考えることできる人なんだよな」と。武蔵には、そのことを大切にしようとする環境があると思います。

なぜ自ら調べ自ら考える力が大切なのか。そして、本当に皆さんは自調自考のエンジンを装着できているか。どうぞ皆さんも考えてみてください。

なお、このアスペンセミナーは、高校生対象のものがあります。11月の休みの日に全国の高校2年生を対象に行われますが、武蔵生も3名の枠の中ならどうぞということでした。参加費は無料で、賛同する企業からの支援金で賄われています。すでに社会科の先生に募集をお願いしています。近々締め切りということですので、興味のある人はどうぞチャレンジしてみてください。

さて、最後になりますが、この二学期から、先ほど紹介した赤城の国際交流合宿にも参加してドイツ、オーストリア、フランスからの留学生8名が高1高2の教室に加わりまます。この後それぞれ自己紹介をしてもらいますが、ぜひ、実り多い二学期になることを心から願って、私の話の方はこれで終わります。